

こいかつ
恋活！

目次

恋活!
れんかつ

〜れんあいかつどう〜

225

恋活!
こいかつ

〜こいびとかつどう〜

5

恋活！
こいかつ

〜こいびとかつ〜

「松沢茜さん。アンタは今年中、災難が続くであろう」

金曜日の夜。友人からの食事の誘いを断り、仕事を終わらせた私は占いの館をハシゴしていた。この水晶占いの館で、すでに五軒目だ。そして今、先の四軒と同様に、最悪な占い結果を突きつけられている。

室内は薄暗く、明かりはろうそく一本の光のみ。

天井から幾重にも垂れ下げられた真つ黒なサテン地のカーテンのせいで、怪しい雰囲気になっている。

部屋の内装もさることながら、一番不気味なのは、この占いの館の主人であるお婆様だ。

彼女は黒地のロングドレスを身に纏い、口元をベールで隠している。むき出しの目はギロリとしていて、見つめられるだけで、思わず後ずさりたくなってしまう。

お婆様は、十分ほど前、恐る恐る入室した私に椅子に座れと言うと、仰々しく水晶に手をかざして覗き込んだ。

その姿勢のまま、鋭い視線を水晶に向けること数秒。お婆様は大きく息をつき、先程の最悪な未来を予言したのだ。

今は十一月初旬。今年中ということは、あと二か月は災難が続く計算だ。

そう思い、私がつくりと項垂れていると、お婆様は小馬鹿にするようにフンと鼻で笑った。

ギリギリと歯ぎしりをしたいところだが、グツと我慢して頬をピクピクと引き攣らせるにどどもめる。

「えっと……それは、本当のことでしょうか？」

「ああ、間違いない」

何度も言わせるな、と言わんばかりの口調に、私の頬はますます痙攣した。

こんなの嘘に決まっている。そう思いたいのだが、今の私は、そんなごまかしがきかない状況に置かれていた。

松沢茜、二十九歳。

短大卒業後、老舗お菓子メーカーである株式会社オリーブ・ベリーに入社し、経理部に配属になつてから……うん年経つ。

身長は百六十七センチもあるので、女性にしては長身の方だろう。

よくスレンダーだと評されるが、要するに凹凸がない身体ということだ。

少しでも女らしく見せるために、黒い髪を背中長さまで伸ばしているもの……その効果は、

いかほどのものか。

サバサバした気性と荒っぽい口調のせいでも、同僚や後輩から姉御と呼ばれ続けてきた私には、実は秘密の乙女趣味がある。それが占いだ。

と言っても、自分でタロットカードや水晶を使い占うわけではない。評判の占い師をハシゴしたり、占いの書籍を買って運勢をチェックしたりする程度だ。

そんな私はこのところ、悩みを抱えている。

あれは、今週の月曜日の朝。私は日課となっている占いのチェックのため、テレビの電源を入れ、情報番組にチャンネルを合わせた。

いつもなら当たり障りのない運勢が出るのだが、その日に限っては『当分いいことはなさそう。じつところえて』などと、やけに深刻なメッセージを告げられたのだ。朝一番から不吉な結果を聞き、身震いがした。

嫌な予感を覚えて、通勤途中でファッション雑誌を購入し、掲載されている占いを見ると、『思ってもよらぬ災難があなたを襲うかも。気をつけて』との警告。

そのときは、占いなんて当たるも八卦当たらぬも八卦と言うじゃないかと、自分を慰めた。

だが、それからというもの、不幸な出来事ばかりが続いているのである。

まずは、この人だけは共に最後まで独身を謳歌するであろうと思っていた親友の南涼花が、電撃結婚を決めたこと。

最後の砦だと思っていたのに裏切り者！ と電話越しに叫んだのは、同じ月曜日の夜のことだっ

た。私の友人はこれですべて既婚者となり、私だけが独身という、なんとも空しい状況に追い込まれた。

そして火曜日の朝。

私はふんわりと揺れる、膝丈のフレアースカートを穿き、ウキウキ気分で出社した。

カツカツとヒールの音を立て、廊下を颯爽と歩くカツコいい女を気取っていたはずなのに……靴を持ち直した拍子にスカートが巻き込まれ、大きく捲かれてしまったのだ。

慌てて手で押さえたが、時すでに遅し。数秒は下着丸見え状態だっただろう。

誰もいないことを祈って辺りを見回したところ、後ろに同期の梅田が立っていた。

梅田は私の顔を見るとブツと噴き出して、「朝からご馳走様、松沢」と慰めるでもなく去った。

その瞬間、梅田に殺意を覚えたのは、無理のないことだと思っ。

さらに水曜日の就業中。

後輩女子が切り忘れた売上伝票の件で、なぜか私が怒鳴られた。

だが、後輩に仕事を教えたのは私だ。その彼女がミスをしたのなら、教育係の私が怒られるのは仕方がない。

そう考えて、黙って怒られていた私だが、当の後輩は事情がわかっていなかっただのか、自分の席で恐々と様子を窺っていた。しかし途中で自分が原因だと理解したらしい。怒鳴り散らしていた上司に彼女が慌てて謝ると、上司は途端に猫なで声を出したのだ。

「いいんだよ、ミスは誰にでもあるからね」と言っ、彼はスタスタと立ち去った。

ちよつと待つて、私に謝罪のひとつもないのか。そう叫びたくなつたのは、言うまでもない。極めつけは木曜日の帰宅中。

工事現場の近くを歩いていたら、突然空からペンキが落ちてきた。私の身体にはペンキがつかずに済んだが、お気に入りのワンピースにはベツトリと赤いペンキがついてしまった。

工事現場のおじちゃんたちが「クリーニングに出す」と言ってくれたけれど、汚れた範囲が広すぎて、まず元通りにはならないだろう。「なら、弁償する！」と言われたが、それは遠慮した。

何せ友人の手作りワンピースで、ふたつとない代物しろもの。どこを探したって手に入るわけがないし、値段のつけようもないからだ。

そして金曜日の今日。

仕事をなんとか定時に終わらせ、私はこうして古い巡りをしている。

当たると評判の大御所おおごから、聞いたことがない古い師まで、総勢四名に占ってもらつたのだが、返ってくる言葉はすべて同じで『災難は回避できない』だつた。

これが最後と決めて飛び込んだ水晶すいしょう占いでも、結果は先程の通り惨敗ざんぱい。がつくりと肩を落とす私わたしの前で、お婆様おばさまは突然「ん？」と声を上げた。

どうしたのかと様子を窺うかがつていると、お婆様は再び水晶を覗き込み始める。そして興味深そうに深く額うなずいたあと、私に顔を向けた。

「……ひとつ聞くが」

「はい？」

「アンタ、男と長続きしないだろう？」

「っ！」

なぜお婆様おばさまがそれを知っているんだ。驚愕きょうがくの表情を浮かべる私を、お婆様はフンと鼻で笑つた。

「だろうと思つたよ。水晶にも、しつかりそう出てる」

「……」

水晶、恐るべし。私は何も映っていない水晶玉をジツと見つめた。

お婆様おばさまが言う通り、私は男と長く関係が続いた試あそびがない。このちよつと雑な性格が災わざいして、いつの間にか女として見てもらえなくなつてしまうのだ。

学生の頃は友達付き合ひの延長みたいな交際あひだをしていた。けれど社会人になつて以来、いい雰囲気にはなるが、付き合う前に「何かが違う」と言われて交際に発展しない。たとえ友達以上恋人未満あせの関係になつても、相手が男友達と一緒にいる感覚になるのか、そのまま友達に戻つてしまふのだ。

そんな私でも二年前までは恋人がいたが、結局うまくいかず、破局を迎えたのだ。

それからは恋をすることを諦あきらめてしまい、彼氏を作らなくなつた。

男枯れしている現実現実に危機を感じてはいるのだ。現に、友人たちの結婚報告あせに焦る気持ちもある。しかし、私がいくら焦つても、世の男性は『松沢茜あせ』が女性であると認識してくれない。こうなるともう……仕方がないと思うしかないだろう。

あとは、この世界のどこかに物好きがいることを祈るばかりだ。

がつくりと項垂れる私に、お婆様は怪しげな声で笑い出した。

「災難を回避するための秘策はある」

「ほ、本当ですか！」

そんなものがあるなら早く言つてよ。人をこんなに落胆させるとは、なんて人が悪いお婆様なんだ。

嬉々としてお婆様を見つめる私を見て、彼女は笑うのをやめ、大きくため息をついた。

「他のお嬢さんなら、こんなのにすぐに解決できる。しかし、アンタじゃねえ」

「どういうことですか、それ」

カチンときて眉を寄せる私を見たあと、お婆様はもう一度水晶に手をかざす。

「災難を回避したければ、男を作るんだね」

「男？」

「そう。必ず作る。そうしないと……」

「そうしない？」

ゴクンと唾を呑み込む。ギュッと握り締めていた拳は、嫌な汗でベトトリしていた。

前屈みになる私に、お婆様はニヤリと意味深に笑う。

「これ以上は言わないでおく」

「ど、どうしてですか!？」

私が立ち上がって抗議すると、お婆様はシッシツと手で追い払う仕草をした。

「さあ、お客さんがお帰りだよ」

「ちよ、ちよっと！ 肝心な内容を聞けていないし……」

「ちようど、占い時間が終わったからねえ」

「いや、ありえないでしょう！ 気になることを言っておいて、これで終わり？」

しかし私の叫びなど無視して、お婆様は部屋から出ようとする。止めようとしたが、すぐ近くにいた助手たちに羽交い締めに使われてしまった。

それに抵抗しながら、「教えてください！」と叫ぶけれど、お婆様はケケケツと不気味に笑うだけだ。

「あとは、アンタが持っている運に賭けるしかないだろうねえ」

「運って！」

「掴んだら離すんじゃないよ。名前のイニシャルがAの男だ。間違えないことだね」

意味がわからない。しかしそれ以上、お婆様からの返答はなく、私は助手たちに館から摘まみ出された。

私を外に追い出すと、助手の一人が閉店のプレートを扉にぶら下げ、内側から鍵をかけてしまった。

ドンドンと扉を叩いても大声で叫んでも、何もアクションが返ってこない。

「肝心の男を作るためのアドバイスはないの？ 男を作らないと私、どうなっちゃうの？」

大きな占いの館の前に、私はただ途方に暮れるのだった。

ここは会社近くにある居酒屋『紗わ田』。酒の種類も多く、そして何より肴がおいしいと評判のお店だ。

よく会社の同僚たちと仕事終わりに訪れているが、こうして会社がお休みである土曜日に来たのは初めてだった。

いつもは、客の大半がスーツ姿のサラリーマン。だけど、今日はラフな格好をした人の方が多い。そんな『紗わ田』の、少し奥まった座敷席で、私は神妙な顔をして頭を下げていた。

「頼む。一生のお願い。年内いっぱい、私の彼氏役をしてほしい」

「は……？」

何を言われたか理解できなかったのか、目の前の男はぼかんとする。そして次の瞬間——彼は、勢いよくビールを噴き出した。

「本当にもう、汚いなあ」

私は、まだゲホゲホとむせている男を放置して、お手拭きでテーブルを拭く。

「ダスターいりますか？」という店員の声に、大丈夫と手を振る。

その間にやっと落ち着いた男——梅田は、真剣な顔をして呟いた。

「お前、それ……本気で言っているのか？」

「本気だよ。じゃなければ、わざわざ休日に梅田をこんなところに呼び出さないって」

「だろうけど……マジかよ」

ため息まじりに言ったあと、梅田は天井を仰いだまま動かない。

梅田晃、三十一歳。私と同期入社で、老舗お菓子メーカー、株式会社オリーブ・ベリーの営業一課の課長様だ。

同期といっても、私は短大卒業後に入社したから、大卒の梅田とは二つ歳が違う。だけど、敬語を使わず好きにさせてもらっている。

同期の出世頭である梅田は、女子社員の人気が高い。

爽やかな出で立ちで、仕事ができる優しい男。これだけ揃えば、向かうところ敵なし！ と言いたいところだが、そんなことはなかったようだ。

彼には、社内に片思いの女の子がいたという噂がある。

その想い人にアプローチもできないまま、彼女は社外の男とめでたく結婚したらしい。この件について本人に直接聞いたわけではないから、本当なのか嘘なのかはわからない。

ただ、梅田ならどんな女でも靡くと思っていたため、噂を聞いたときはかなり驚いたものだ。

「お前なら、すぐ男ができるだろう？」

「できないし、女扱いされない」

断言する私に、梅田は「ああ……」となぜか納得した表情で、再び天井を仰ぐ。

それって何気にバカにしていますかね、梅田くん。

なんだか悔しくて、呷るようにビールを飲んでみると、梅田は私にチラリと視線を送ってきた。「それにしても突然呼び出しておいて、あれはないだろう」

「そんなこと言ったって、梅田しか思いつかなかったの」

言い切る私に、梅田は大きくフウと息を吐き出した。

同期の中でも梅田とは特に仲が良い。そのきっかけとなったのは、新入社員オリエンテーリングだ。

オリブ・ベリーでは、新入社員オリエンテーリングは必ず山登りと決まっている。忍耐力と団結力、そして達成感を味わうために実施するらしい。

その山登りの班分けで、私と梅田、そして数人のメンバーが一緒になった。

しかし、私以外の班員はすべて大学卒業組で二つ年上。同じ新入社員とはいえ、どう接すればいいのか迷っていたときに声をかけてくれたのが、梅田だった。

「なんだ、もしかして俺より二つも年下なのか!? よし、それなら君に、俺の背中を押す係を任命する。おじさんは体力がないから、なんとしても俺を頂上まで連れて行ってくれたまえ」

彼がそんな冗談を言うと、一気に場の雰囲気明るくなり、私は班に溶け込むことができたのだ。実際には、私が梅田に引張ってもらって頂上にたどり着いたという少しだけ情けないエピソード付きだが、あの頃から彼は優しかった。

そのオリエンテーリング以降、仕事帰りに同期たちと飲みに行くことが、ままある。

特にこの二年間は、私も梅田も恋人がいなかったため、彼とは頻繁に顔を合わせていた。

しかし、こうして会社がない日に彼と二人きりで飲むなんて、初めてのことだ。

本当なら月曜日まで待って、今回の件を梅田に相談するのが一番良かったのかもしれない。けど土曜、日曜を心穏やかに過ごす自信がなく、待てなかったのだ。

もしグズグズしていたら、また新たな不運が起きるのではないかと思うと、いても立ってもいられなかった。

月曜から今日まで、一日一回は何かしら良からぬことが起こってきた。認めたくはないが、占い師たちの言葉は当たっている。

こうなったら、水晶占いのお婆様が言っていた『災難を回避したければ、男を作るんだね』という言葉に縋るしかない。

となれば、すぐさま彼氏を作るべきである。しかし、残念ながら適当な相手がない。そもそもそんな心当たりがいれば、とっくに男枯れの状況から抜け出していただろう。

それでも諦めきれず、周りにシングルの人間はいないか考えたとき、まっ先に頭に浮かんだのは梅田だった。

彼には今、彼女はいないはず。だから彼氏役を頼めるだろうと思いついた。

それで休日の今日、この居酒屋『紗わ田』に有無を言わず梅田を呼び出し、頼み込んだのだ。

「一体なんなんだよ、年内いっぱい彼の氏役って……」

ようやく落ち着いてきた梅田が、眉根を寄せて問いかける。

「あ、彼氏というか、恋人活動って感じかな。略して恋活! とにかく恋人のふりをしてほしい。

徹底的にさ」

いわゆる世間一般でいう『恋活』は、恋愛活動の略語だ。恋愛をするために、恋人を作る活動をいうらしい。

しかし、私の場合は違う。私にとつての『恋活』とは、恋人のように振る舞う活動をして、神様の目をごまかすこと。うん、我ながらいいネーミングだ。

とはいえ、確かに突拍子もない話だったかもしれない。今さらだが少し反省し、身体を縮こまらせる。

梅田はおしぼりで口元を拭くと、コホンと小さく咳払いをした。

「その前に、どうして松沢が男を作らなければならなくなったのか。理由を話せ」

「端折っていい？」

「ダメ。しっかり隅から隅まで話せ」

仕方がない。梅田に力添えしてもらわねば、自分の身が危ういのだ。

私は、この一週間の出来事と、占い師たちの言葉をすべて話した。

最初は真剣に聞いていた梅田だったが、占い巡りをした日に話が及ぶと、おかしくて耐えられないといった様子でクスクスと笑い出した。

「なんだよ、そんな占いを気にしているのか？」

「だって、どこの占い師も同じことを言うんだよ？ 怖くない？ やばくない？」

「偶然だって、考えすぎ」

カラカラと笑って枝豆に手を伸ばそうとする梅田の手を、ペチンと叩く。

「痛いなあ。叩くことないだろう」

「痛くない、優しく叩いたし。そうじゃなくて。本当に助けてもらいたい。真剣なのよ、こっ

ちは」

しっかりと話を聞いてよ、と最後は泣き真似までしてみたが、目の前の男は落ちなかった。

私みたいな、イマイチいけない女の泣き落としなんか引つかかるような相手ではないよ
うだ。

口を尖らせて拗ねる私に、梅田はニヤニヤと意地悪く笑った。

「確かに災難続きだよな。パンツまでさらけ出していたしな」

「うるさいよ、梅田。エッチ、スケベ」

「無理やり見せておいて、よく言うぜ」

忘れたい過去を思い出させた上に笑うなど、男の風上にも置けない。

惨めさと怒りに身体を震わせていると、店員が「お待たせいたしました」と声をかけ、注文した料理をテーブルに置いていく。

怒り狂っていた私だが、食べ物物を前にすると機嫌が直ってしまう。

「ほら、食え」

梅田は湯気が立ち上る焼き鳥を一本つまんで、私に差し出した。私はその串を受け取り、ほおばる。じわりと口の中に広がる肉汁と、タレとのハーモニーが絶妙だ。

「うまいだろう」

「うまいよ、うまいけどさ」

モグモグと焼き鳥を食べる私に、梅田は優しく目を細めた。全く、笑顔の大安売りだわ。特に意味がない笑みだとわかっていても、至近距離でカッコいい男が自分に向かってほほ笑んでいるかと思うと、顔が熱くなる。

私は恥ずかしさをごまかすように、無言で焼き鳥を味わい続けた。

「うまいもん食って、酒飲んで忘れる。来週にはケロツとしていいるから」
「むー」

梅田のその言葉に縫^{すが}りたいし、そうであってほしい。だけど、本当に来週には平常運転になるのだろうか。

私は眉間に皺^{しわ}を寄せて考え込み、ビールが入ったグラスをギュツと握り締める。

すると梅田は、自分が持っていたグラスを、乾杯^{かんぱい}するみたいに私のグラスに当てた。

「大丈夫、そんなの当たらないから」

「……うん」

「心配していると、余計に気になっちゃうもんなだよ。気にするな」

「うん、そうだよね」

そうだよ、と笑って梅田は私のグラスにビールを注^ついだ。シュワシュワと泡^はが弾^はける音を聞いていたら、本当に大丈夫な気がしてきた。

私って結構単純で、おめでたいヤツなのかもしれない。

「今まで悪いことばかり起きたんだし、もうこれ以上はないよね！」

「その意気だ。大丈夫だから。ほら、飲め松沢」

梅田に大丈夫だと言われたら、それで解決した気になった。

彼の言う通り、迷信だよ。占いなんて、そんなに当たるものじゃないしね。

ただ、この五日間、不幸が続いただけ。来週になれば、厄^{やく}が落ちて平穩^{へいおん}な日々が来るはずだ。

「よし、飲むぞお！ 梅田も付き合え」

「もう付き合ってるって」

苦笑するカッコいい男を眺めながら、私はビールを飲み干した。

* * *

「松沢は、今後、酒を飲まなくてもよろしい」

「なんでよ」

「ミネラルウォーターみたいに飲みやがって。金の無駄だ。これから松沢は水にしろ」

「酔わなくても、味を楽しめればいいのよ」

二時間ほど酒の席を楽しんだあと、居酒屋『紗^さわ田』から出て、駅までの道のりを梅田と肩を並べて歩く。

秋も深まり、少し冷たい風が頬を掠める。酔っていないとはいえず、やっぱり身体は熱を持っているようで、大変気持ちいい。

駅に続く大通りを行く間、梅田と他愛のないことを話す。

居心地がいい時間を過ごしていたら、ここ最近の不運なんて、すっかり忘れてしまった。

梅田の言う通り、この五日間は、ただ運が悪かったただけだ。

水晶占いのお婆様の忠告は間違いだらう。そうに違いない。

空を見上げると、私たちを照らしているまんまるお月様が目に入った。星もキラキラと瞬いて、とてもキレイだ。

アルコールが入り、いい気分になって月を眺める私の横で、突然、梅田が叫ぶ。

「松沢、危ない！」

その言葉に驚いて身体を強張らせた私は、気がついたら梅田の腕の中にいた。

どうしたのかと慌てていると、私の近くでガシャンと大きな音が響いた。

梅田に抱かれたまま、音がした方向に視線を向けたところ、さっきまで私が歩いていた先に、工事現場の看板が落ちていた。

目をこらして頭上を見れば、看板を吊るしてあったらしき鎖が切れて揺れている。どうやら、あそこから落ちてきたようだ。

それを見て、ジワジワと恐怖が込み上げてくる。

「梅田……」

私は、梅田のシャツをギュッと握り締めた。

もし、あのまま呑気に歩いていたら……私は、きっと、この看板に当たっていたはずだ。こんな固いものが頭にぶつかれば、大ケガをしたことだろう。

頭上から「大丈夫ですか？」という、作業員の慌てた声が聞こえた。

「大丈夫です」

梅田が私の代わりに答える。そんな光景をボンヤリと見つめながら、私は自分の身体をきつく抱き締めた。

まだ震えが止まらない。ガクガクと身震いする私を、彼はそのたくましい腕で力強く抱き締めてくれた。

梅田の体温が伝わってきて、それだけで安心できる。

今日は、梅田と初めてなことがかりしている。休日の夜に会うのもそうだが、こうしてギュッと抱き締められるなんて、今までなかった。何年も顔を突き合わせているのに、こんなに接近したのも初めて。

だからだろう、無性に恥ずかしさが込み上げてきた。

慌てて梅田から離れようとしたのだが、膝が突ってしまったって、動けない。

それがわかったのか、彼はゆっくりと私の背中を撫でてくれた。温かくて大きな手のひらが、不安を取り除いてくれているみたいだ。

しばらく大人しく撫でられ続けた私は、ふと、あることに気づき、恐々と口を開いた。

「ねえ、梅田。これって今日の分？」

「今日の分って？」

「だから、占いの……」

「ばかばかしい。そんなの気にしすぎだ」

「でも！」

今日はまだ災難は起こっていなかった。だからこそ、居酒屋『紗わ田』での「考えすぎ」という梅田の言葉を鵜呑みにして、お酒を楽しんだ。

しかし、今日も災難が降りかかってきた。やっぱり、占い師たちの言葉は本当だったのだ——
何度も訴えるが、彼は首を横に振って否定し続ける。

もう少し真剣に取り合ってくれたってバチは当たらないのに。不満げに見つめていると、梅田は安心したように大きく息をついた。

「とにかく、松沢が無事でよかった」

「……うん」

「これは古い師が言っていた災難とは別のもの。たんなる事故だ」

でも、と抗議する私に、梅田はもう一度首を横に振る。

「松沢は考えすぎだよ。不運をすべて占いのせいにしていないか？」

「……」

梅田の言う通り、ここ数日の間に起こった災難は、ただタイミングが悪かっただけかもしれない。

もともと私は占いが好きだ。だからこそ、ちょっと信じすぎているところもあるので、それを指摘されると何も言えない。確かに、なんでも占いのせいにするのは間違っているだろう。

だけど……怖い。なぜ、私にばかり不幸な出来事が起こるの？ 週が変われば降りかかる災難も減るのだろうか。それとも、水晶占いのお婆様が言ったようになってしまうのか。想像するだけで背筋が寒くなる。

「とにかく帰ろう。今日は家まで送っていくから」

「……うん」

いつもの梅田なら、家まで送るとは言わない。駅に着いたら、そこでバイバイだ。

しかし、ついさつき起きた事故で私が怯えきっているのがわかったのだろう。それでもなければ、こんな申し出はしないはずだ。

彼は、腕の中から私を解放したあと、手を握ってきた。

「松沢は危なっかしいから、家までしっかり連れて行ってやる」

「何よ、それ……」

悪態をつきながらも、私は梅田の手を振り払わなかった。彼は私の手をそっと握っていたが、私はギュッと握り返す。

いつもの私なら、梅田に甘えることはない。下手に梅田を男として見てしまうと、きつと、彼に好意を寄せる子たちに睨まれるだろう。だから、梅田とは友人かつ同期として、ある一定の距離を保っていた。

だけど、今夜は……少しだけ梅田に縋りたい。先程の光景を思い出すと怖くて、そのたびに梅田の手を握り締めてしまう。

そんな、いつもとは様子の違う私を、梅田はからかわない。

彼は上司がどうだとか、商品がどうだとか、そういう同期らしい会話をして穏やかな雰囲気を作り上げてくれた。

会社の最寄り駅から電車に乗り、二駅目で下車する。その駅は、私が子供の頃から利用している、自宅の最寄り駅だ。

駅前は近代的で大きなビルが立ち並びビジネス街だが、十分歩けば、昔ながらの住宅地が見えてきた。

「こっちでいいのか？」

辺りを眺めつつ、方向を示して尋ねる梅田に、私はこくりと頷いてみせた。

「うん」

ふと、今までの五日間、災難は一日一回限りだったことを思い出す。それなら、今日はもう何も起こらないはずだ。

そのことを梅田に言おうとしたが、やめておいた。きつと「占いを信じるな」と怒られるのがオチだ。

それにしても、と自分の手を見つめる。

電車に揺られている最中と、電車を降りた今も尚、彼は私の手を握ってくれている。こんなふう

に梅田と手を繋いで歩く。そんな出来事が起きるだなんて、今まで想像したことなかった。だから、不思議な気分だ。

意識し始めたら、急にとても恥ずかしくなってきた。

私の家はすぐそこ。家族に見られたら居たたまれない。つい考え込んでしまった私を余所に、梅田は涼しい顔で付近の家の表札を見る。

彼は『松沢』という表札の家を見つけると、ゆっくり私の手を離した。

「とにかく、さっさと家に入れ。家の中なら、大きな事故は起こりにくいはずだ」

「……だと、いいけれど」

外にいるときに比べれば、さっきの看板の落下のような災難が起こる可能性は低くなるだろう。

ここは梅田の言う通り、早く家の中に入った方がよさそうだ。

「あんまり沈むなよ。松沢は気にしすぎるところがあるから」

「ふーんだ」

何度も言われなくなってきたってわかってはいるし、と私は可愛げのない態度をとる。すると、梅田は私の頭を、ガシガシと乱暴に撫でた。

「じゃあな、また会社で」

「うん……今日はありがとう」

小さく礼を言う私を見て、彼は目を細め、大きく頷いた。

梅田は私に背中を向け、手を軽く上げると、駅へ続く道を歩いて行く。その背中が見えなくなる

まで見送ったあと、私はいつものように「ただいま」と玄関の扉を開ける。

「茜、帰ってきたの？」

リビングの方から、お母さんの猫なで声が聞こえた。

私は嫌な予感がして、家に入るのを一瞬ためらった。お母さんがこんな声を出すのは、何か思惑がある時だ。

靴を脱いで恐る恐るリビングに行くとお父さんとお母さんが並んでソファに座っていた。お母さんは「そこに座って」と、ローテーブルを挟んだ向かいのソファを指さす。渋々座る私を見て、お母さんは真剣な面持ちで言った。

「茜も二十九歳だし、そろそろ結婚を考えてもいい頃よね？」

「……」

質問口調ながら、「結婚するべき」と言っているように聞こえるのは、私だけだろうか。

逃げ腰の私を、「絶対に逃がしはしない」とハンターの目で見つめるお母さんが怖い。

私は目の前に座るお母さんから視線を逸らし、その隣にいるお父さんに視線を向ける。しかし、お父さんは私と視線が合うと、わざとらしく新聞で顔を隠した。どうやら助けてくれるつもりはないらしい。

お父さんがお母さんにたちうちできないことぐらい、最初からわかってた。だが、可愛い娘を助けるそぶりくらい見せたついでいいではないか。

晩婚化が進む今、そんなに急いで結婚しなくてもいい、と私は主張したい。

私はもともと男性と付き合っても長続きするタイプではないし、愛とか恋とか、今となってはよくわからない。

「好きです」と言われた経験はある。

だけど、付き合うと相手がいつの間にか冷めていく。それなら、どうして告白なんてしたのだろう、と思うことがずっと続いた。

だから私は、男性からの好意とか愛情を信じられなくなっている。今は好きだ、愛していると書いていても、いずれ離れていってしまうはずだ。

女というより男友達みたいだと、すぐに男から愛想をつかされる私では、結婚なんて、夢見るだけ無駄だろう。

しかし、完全に開き直っているわけではない。結婚はしないでだろうと踏んでいた、親友の涼花が結婚を決めたと報告してきた際、私はかなり動揺した。

それを聞いたときは、これから私はどうすればいいのか、真剣に悩んだ。独身のまま未来を迎えることを、初めて怖いと思った。

結婚だけがすべてじゃない。幸せの形は十人十色。自分らしい幸せを探していけばいい。

そう考えている反面、危機感を覚えていることも事実だ。

そんな不安定な精神状態の私に一週間も災難が降り注いだのだから、ビクビクと怯えても仕方ないことはない。

それなのに梅田は、「占いなんて信じるな」の一点張りだ。

同期のよしみで、私の願いを叶えてくれたって、バチは当たらないじゃないか。好きな女の人ができるまでの、期間限定の恋人役でいいって言っているのにさ。

今日の梅田の態度を思い出し、なんだか腹が立ってきた。私があれば不安がっていたのに、全然取り合ってくれないなんて。

（私だって、信じたくないよ！）

だけど、占い通りの不幸な出来事が、次から次に起きている。その状況で「信じなければいい」などとは思えない。

「ねえ、茜。聞いているの？」

「あ、え？ なんだっけ？」

あれこれ考えていたら、お母さんの話を聞き流していたようだ。慌てて返事をする私に、お母さんは「もう！」と頬を膨らませた。

「だから、お見合いしてみない？ って聞いたのよ」

「えっ!? お見合い!? ……いやいや、相手がいないんじゃない？」

「大丈夫よ、町内会長の奥様にお願ひしてきたから」

「……」

あからさまに嫌そうな顔をする娘を無視し、お母さんは胸を張った。

「あの奥様に任せておけば間違いないわ。縁談を纏めることに関しては、右に出る者はいないっていう話だし」

いや、待って。その表現は一体なんなんだ。頭が痛くなってきた。

『私は、今月五件も縁談を纏めましたの』

『あら！ 私は六件ですよ、おほほほ！』

という会話を、誰かとしているとでもいうのか。

呆れ返って言葉も出ない私とは対照的に、お母さんはテンション高く喋り続ける。

「奥様がね、『茜ちゃんなら大丈夫。いくらでも縁談を見繕ってあげる』っておっしゃっているのよ」

「……」

『『大船に乗ったつもりでいてちょうだい』ですってよ。よかったわね、茜』

母よ、まずは私の気持ちを聞こうか。

突っ込みどころ満載の話に、私は大きくため息をついた。

「あのさ、せめて私に見合いをする気があるかどうか、確認するところから始めてくれないかな」
「あら、今まで彼氏がいたこともあったんだし。それなりに結婚願望があるんじゃないの？」

確かにその通りだ。だが、突然見合いだと言われても困る。

顔を顰める私に、お母さんはそのままの勢いで畳みかけてきた。

「ここ二年、誰とも付き合っていないでしょう。出合いが少なくなってきたらいいんじゃない？」

「……」

お母さんの言うことは凶星だった。友だちがほとんど結婚してしまい、合コンなどの出会いの場

が急激に減っていたのだ。

「いいじゃない。お見合い。これもひとつの縁でしょ？」

「そうかもしれないけど……」

すでにお母さんに丸め込まれそうになっている。

どうにか覆くつがえしたいところだが、お母さんの意見も一理あるだろう。だからといって、「はいはい、お見合いですね」といい返事はできない。

ウジウジと考え込む私に、お母さんはぴしゃりと宣言した。

「いいわね、茜。町内会長の奥様からいい人を紹介してもらって、絶対にお見合いしてもらいますからね！」

「ヤダ」

口を尖とがらせ、ふて腐れる私を見ても、お母さんは容赦ようじやない。

「そんな子供っぽい顔しても無駄よ。すでに似合わない歳だし」

「うるさいよ」

するとお母さんは問答無用とばかりに、ダンと強くテーブルを叩く。驚いた私とお父さんの身体が、ぴよこんと跳ねた。

「とにかく！ これは決定事項ですからね。わかったわね」

ここで「わからない」と言えば、状況は変わるのだろうか。否いな、変わらない。それなら、これ以上お母さんの逆鱗ぎせきりんに触れないようにする方が、賢明だ。

私が黙りこくっていると、お母さんはツンとすまして腰に手をやる。

「もし、見合いが嫌だというのなら、それまでに彼氏を作ってらっしゃい」

「それこそ無理！」

「なら、仕方ないわね。奥様が出会いの場を提供してくださるのよ。感謝しなさい」

したり顔のお母さんに何を言っても無駄だろう。もし反論したら、百倍にして言い返されそうだ。私は、心の中で白旗を振り、立ち上がった。

「疲れたから今日は寝る」

お母さんがまだ何か言っていたが、すべてシャットアウト。私はバタバタと階段を駆け上がり、部屋に閉じこもった。

* * *

今日は日曜。昨日は疲れ果てて、割と早い時間から泥のように眠ったので、今朝は早くに目が覚めてしまった。

起床してすぐ時計を見たときは、まだ七時だった。

ベッドから這よい出た私は、お母さんたちが起きる前にシャワーを浴びて、いつもより力を入れたメイクをし、お気に入りのワンピースを着た。

占いを信じるなら、このまま大人しく家にいた方がいいのだろう。外に行けば、昨日のような事

故があるかもしれない。

「ただ、このままふさぎ込んで家の中にいるのも性に合わない。早めに家を飛び出して、好きなことをしよう。そうすればきっと、気持ちも浮上するはず。」

善は急げ、と私はこつそり階段を降り、ゆつくりとパンプスに足を入れる。

ここでお母さんに見つかったら、元の木阿弥もくあみ。また縁談の話で、何時間も拘束こうそくされてしまうに違いない。

私はパンプスを履き終えると、静かに扉を開く。しかし玄関を出ると、ちょうど町内会長の奥さんが我が家の門を開けるところだった。

「あら、茜さん。ちょうどよかったわ」

「……」

見上げれば、透き通るほどキレイな青空が広がっている。だが、この状況はとても、清々すがすがしい朝からはほど遠いだろう。

満面の笑みを浮かべた町内会長の奥さんを目の前にして、私は頬が引き攣つるのを隠すことができない。

「回れ右をしたかったけれど、こうなってしまうと、逃げることは無理だ。」

「お、おはようございます」

「おほほ。おはよう、茜さん。お母様からお見合いの話は聞いているかしら？」

「えっとですねぇ……」

「なんとかここで断つてしまおうと目論もくろむ。しかし奥さんは私の答えを待たず、凄い勢いで捲まき立てた。」

「任せておいて！ 私の手にかかれば、良いご縁に恵まれますからね。さあ、そうと決まれば善は急げよ。我が家にいらして？」

普段はいかにも人畜無害で、ほわほわとした優しい笑みが絶えない奥さんだが、縁談のことになると人が変わるらしい。

遠慮する私の腕を強引に引っ張り、町内会長の自宅へと引きずり込んでしまった。

奥さんは私をリビングのソファーに無理やり座らせると、ジリジリと近付いてきた。そして、書類の束を手渡してくる。

「え？ こ、これは？」

「あら、これ全部、茜さんへの縁談よ？」

「え!？」

パッと見ただけで十枚はあるように思う。呆気あっけにとられている私に、奥さんは自慢げにほほ笑んだ。

「久しぶりに腕が鳴ったわよ。茜さんは美人でしょ？ その横に並ぶなら、やっぱり美男子じゃなくちゃね」

「は、はあ……」

「絵面的えづらにね、バランスがとれていないと許せなくて」

おほほ、と朝から甲高い声で笑う奥さんに、苦笑いをするしかない。引き攣る頬を隠すこともできずに固まる私の手から書類を引き抜くと、奥さんは私の目の前でそれを開き出した。

「ほら、見て。こちらの方ステキでしょ？ 大学の研究室にいる方で、なかなか女性と縁がなかったそうなのよ」

チラリと写真を見ると、確かにイケメンだ。線が細く、すっきりと整った顔立ちで、和風男子と云ったところか。

短く切り揃えられた黒髪は清潔さを漂ただよわしている。職業も外見も、非の打ちどころがない。しかし、私は趣味の項目を見て、眉を顰ひそめた。

爬虫類はちゅうるいの飼育ひそって……。考えただけでも鳥肌が立つ。

今の時代、ペットと一言でいってもさまざまだ。爬虫類が好きな人も多いと聞く。

だが、私はどうしてもダメだ。動物園に行っても、そこだけは避さけたいと思ってしまうほどダメ。絶対にパス。

やんわりと「この方は、ちょっと……」と書類を返すと、すぐに次の書類が差し出された。

「この方は？ 会計士の方ですね……」

渋々写真を見たが、なかなかカッコいい。しかし、どうにも気乗りがせず、私は首を横に振る。

そのあとも、奥さんは次々に男性を薦すすめてきた。しかし、私は一度として頷うなづかなかった。確かに、高学歴で勤め先も申し分ない、高収入の人ばかりだ。

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

そんな男がなぜ、今、私の前に現れたのか。どうやら彰久も私がここにいることに驚いているようだ。彼は目を見開いて私を見つめてから、明るく声をかけてきた。

「茜さん、どうしてここに？」

「……」

「ああ、でも本当に久しぶりだ。元気でしたか？」

奥さんはびっくりした顔で私と彰久の顔を交互に見た。

「あらあら、二人は知り合いだったの？」

「え、ええ」

「まあ、ステキ！ 彰久は私の甥っ子なのだけど……これはご縁よ、茜さん」

「あ、ははは……」

もう笑うしかない。奥さんの甥がまさか元彼だなんて、世間が狭すぎる。

奥さんは目をキラキラさせて、期待に満ちた表情を浮かべ、私の腕をガツシリと掴んだ。

「ねえ、茜さん。うちの彰久とお見合いしてみない？」

「いえいえ、とんでもないです。葛城くんは見ての通りステキな男性ですから、結婚相手なんてよりどりみどりでしょう？」

彰久との恋は、二年前に終わらせた。わざわざ昔の古傷をえぐるような真似をしたくない。それに、どうせもう彼女の一人や二人いることだろう。

何しろ、彼はとてつもなくモテた。今も間違いなくモテるはずだ。

そんなことは私が一番よく知っている。そのせいで私は……彰久と距離を置いたのだから。

「ですから……」

私がつちちりと断りを入れようとした途端、彰久は意味深にほほ笑んだ。そして手を伸ばして私を抱き締める。

彼の腕ががちり拘束されて、私は身動きが取れなくなってしまった。抜け出ようと必死にもがくが、力強くてびくともしない。私は必死の努力を続けつつ、彰久に小声で苦情を言う。

「離してよ」

すると、彰久は片手で私の口を覆い、言葉を封じる。その上、人の耳元で囁き始めた。

「夢みたいだ……会いたかったよ、茜さん」

「っ！」

「俺がどんな思いで二年前、貴女の手を離したと思っっているの。もう、離さないからね」

おい、待てコラ。何を勝手に言っているんだ。そう叫びたいのに、声が出せない。

フガフガと言葉にならない声で叫ぶ私を余所に、彰久は人当たりのいい笑みを奥さんに向けた。

「つてことで、叔母さん。今から茜さんと色々込み入った話をしたいので、出かけてもいいですか？」

待て待て、勝手に決めるな。何を言い出すんだ。文句の一つも言いたいのだが、ムグムグという唸り声しか出せない。

どう見ても私が嫌がっているのがわかるはずなのに、奥さんはすでに縁結びモードに入っ

まったらしく、顔を紅潮させて何度も頷いた。

「ええ、ええ。それがいいわ。旧交を温めるのはいいことですもの」

「そうですね、叔母さん」

「ご縁っていうのは、転がってくるものなのね。今回それがよくわかったわ。ほら、二人ともいつてらっしゃい」

奥さんからは逃れられたが、今度はもつと厄介な人物に捕まってしまった。

彰久に抱きかかえられるように町内会長の家をあとにした。私はこのまま、どこに連れて行かれるのだろうか？

どうにかして逃げてやろうともがいていたら、お母さんが息を切らして駆けつけてきた。

「ちよつと茜。縁談が纏まりそうって本当なの？ 町内会長の奥様から連絡があつて、そりやもうびつくりして」

興奮気味のお母さんはそう捲し立てると、今度は私の傍にいる人物を見て、黄色い声を上げた。

「きゃー！ この方なの？ ステキな方じゃない」

バシバシと私の肩を叩く母よ。まずはこの状況について、疑問はないのだろうか。

明らかに嫌がりながら男に連行されている娘を見て、その言葉はどう考えてもおかしい。

「初めまして、葛城彰久と申します」

「こちらこそ、初めまして。先程、奥様から連絡をいただいたのだけど、町内会長さんとはご親戚なんですってね」

「ええ、甥に当たります。実は茜さんとは旧知の仲でして……久しぶりにお会いしたので、どこかでゆっくりお話ししたいと思つています。茜さんをお借りしていいでしょうか？」

まあ、と感嘆の声を上げるお母さんに、彰久は憎殺スマイルを炸裂させた。

お母さんは、それはそれは嬉しそうに頷き、猫なで声で答える。

「ええ、もちろん。煮るなり、焼くなりお好きにどうぞ」

「いいんですか？」

「葛城さんがもらってくれるなら、喜んで差し出すわよ」

「ありがとうございます」

おいおい、お母さん。可愛い娘を初対面の男に託すとは、どんな了見だ。

私は、突っ込みどころ満載のやり取りに抗議の呻き声を上げたが、二人とも、気にもしてくれなかった。

満面の笑みを浮かべたお母さんに見送られながら、しばらく彰久に引きずられるように進む。私はようやく口を押さえていた彰久の手を引きはがすことができた。

「ちよつと、いいかげん離しなさいよ」

「離さないって決めたから」

「勝手に決めないの。このバカ者！」

「茜さんの罵声、久しぶりすぎて嬉しいな」

いい加減にしてよ、DM！ と罵つたものの、穏やかに笑って流された。彼は一瞬私を解放した

ものの、すぐに手首を掴み、また歩き出す。

これはもう、占い通りの災難——それも、かなりの大災難が降りかかってきたと考えると間違いないだろう。

「今日の災難は、これなのか！」

「何？ 災難って」

「こつちの話！ それより、どこに行くのよ？」

「内緒！」

なかなか行き場所を明かさないう彰久だったが、向かおうとしている場所は、方向からして想像がついた。私はひとまず抵抗を諦め、黙ってついて行くことにした。

やがて、見慣れた懐かしい建物が見えてくる。

彰久に連れていかれた先は、私の予想通りの場所。

春蘭学園。私と彰久が高校生活を送った場所だ。といっても、同じ部活だったとか、共通の友人がいたとか、そういう接点は全くない。この事実が判明したのは、付き合い初めてから少し経った頃だった。

彰久と出会ったのは三年前。友達が主催した合コンがきっかけだ。

あのとときの彼は、付き合ってほしいとしつこかった。

確かにステキな出会いがあるといいなあと思つて合コンに参加したが、年下は恋愛対象外だ。

そう断つても取り合ってくれず、気がつけば彰久の巧みな話術でうまく丸め込まれ、付き合うこ

とになってしまった。

ジワリジワリと相手を追い込む策士ぶりは健在のようで、今もすっかり彼のペースにのせられている。

彰久は私の手首を掴んだまま、校門をくぐる。そしてグラウンドが見える芝生までやって来た。約十年前から何も変わらぬ風景が、とても懐かしく感じる。

ずっと私の手首を掴んでいた彰久だったが、そこでやっと手を離してくれた。

解放されて、私は身体を伸ばして筋肉をほぐす。

「ほら、こつちに座ろうよ」

彰久は近くのベンチに座ると、手をちよいちよいと動かし私を誘った。

私は大きいため息をついたあと、彼の隣に座る。

金属バットで白球を打つ、カキーンという音が聞こえてくる。目の前のグラウンドでは、野球部の面々が汗を流してがんばっていた。

青春なんて言葉がよく似合う彼らを目で追いながら、私は彰久に聞く。

「で？ アメリカに行ったはずの人間が、どうして町内会長さんの家にいたのよ？」

私は前屈みになり、膝に右肘をついて顎を乗せる。私のふてぶてしい態度を見て、彰久はクスクスと楽しげに笑った。しかし、こちらとしては笑えない状況だ。

ブスツと頬を膨らませている私の左手に、彰久の手が重なる。その手を振り払おうとしたが、強い力で掴まれて、びくともしなかった。

「ドラマティックな再会だったね？ 昔、振った男が、まさか突然見合い相手として登場するなんてさ」

「全然ドラマティックじゃない。確かに私が振ったけど、あれは彰久が悪いんでしょう？」

「別に悪くないでしょう。彼女は茜さんだけだったよ？」

「そうだとしても、私は不安だった。可愛い女の子たちと仲良く遊びに行ったり、二人で会ったりしていいさ。私がなんとも思っていないかったとでも？」

彰久は優しく言った。彼女だった私だけにでなく、他の女の子にもだ。

本人にその気がなくとも、周りの女の子たちが彰久に恋心を抱いていることは、一目瞭然だった。それなのに、彰久は彼女たち全員にいい顔をする。私はそれを良しとしなかった。

「日本に戻ってくるまで待っていてなんて言っておいて、舌の根の乾かぬうちに女の子と遊んでいご様子だし。だいたい、彰久みたいにモテる男が、彼女がいるとはいえ遠距離恋愛中だってわかれば、女の子が放っておかないでしょ。そんな人、待ってられない」

彰久が海外に転勤になると聞いたとき、一時は彼を待とうと思っていた。

その考えを改めて別れを告げたのは、転勤の話をした数日後、彼が女の子と二人きりで会っているのを目撃してしまったせいだ。

それを見て、彰久のことを信用して何年も日本で待てないと判断した。別れを告げたあとは、彰久に、そして男性全体に対して不信感を抱くようになり、誰とも付き合っていない。

あれから二年。私は、すっかりひねくれた。

恋とは距離を置き、おひとり様まっしぐらな生活を送ってきたのに、ここにきて彰久が私の前に現れたのである。全く、迷惑極まりない。

唯一の救いは、すでに隣の男に恋愛感情を持っていないという点だろう。

この二年で、やっとふつきましたようだ。えらいぞ、私。やったぞ、私。

「ねえ、茜さん」

彰久は突然私の足元に跪き、恭しく手をとると、甲にキスをしてきた。

一瞬、彼が何をしているのかわからなかった。手の甲に残る、柔らかな感触。こちらを見上げる真剣な眼差し。現実離れた出来事に、私はついていけなかった。ただ驚いて、ベンチから勢よく立ち上がる。

「あ、ありえない……んですけど」

やっと絞り出した言葉は、なんとも間抜けなものだった。

二年前に別れた男が突然、見合い相手として現れただけでもテンパってしまったというのに、その上、跪いてキスしてきた。

恋も結婚も半ば諦めムードだった私にとっては、刺激が強すぎる。

あとからじわじわと恥ずかしさが込み上げてきた。

まずは辺りを見回す。よし、誰もいない。こんな恥ずかしいところを他人様に見られていたら、恥ずかしくて表を歩けない。

挙動不審な私に、彰久は痺れを切らしたように口を尖らせる。

「二年前に別れた日、俺は決めたんだ。今度日本の土地を踏むとき、茜さんが誰のものにもなっていないかったら、絶対にものにしてみせるって」

「……」

「日本には昨日戻ってきたんだ。今日辺り、茜さんに連絡を取ろうと思っていたんだよ」

薄い唇が、夢みたいな言葉を紡いだ。今までの展開とは全く違う。予想もできない告白の数々だ。男友達といるみたいだと冷めて離れていく。それが、私の恋愛の定番だった。

ところが、彰久は今も私のことが好きだと言っている。彼は、揺れる心に畳みかけるように言葉が続けた。

「今までの男たちと一緒にしてもらっては困るよ。茜さん」

「ちょ、ちょっと!」

彰久は突然、私を抱き締めてきた。

彼と付き合っていたとき、この腕の中にいると安心できたことをぼんやりと思い出したが、あのころに感じていた安らぎを、今は感じない

(梅田が抱き締めてくれた方が、ホッとしたな……)

私を抱き寄せ、落下してきた看板から守ってくれたときの梅田の顔は、今まで見た中で一番凛々しくてステキだった。

彼はもともと頼り甲斐のある男だ。視野が広くて、相手の気持ちを引き出すのが上手で、同僚や部下から相談を受けているのをよく見かける。

私がそんなことを考えていたら、彰久が怪訝な顔をした。

「今、何を考えていたの?」

「へ?」

思わず声が裏返る。すると彼は腕の力を緩めて、私の顔をじつと睨んだ。

慌てる私に、彰久は嫌そうな表情を浮かべ、そのあと大きく息をついた。

「まあいいよ。茜さんが結婚していないなら好都合。どんな男がいても、俺が奪いとるから」

「何言っちゃってるのよ、彰久ったら」

あはは、とわざとらしく笑い声を立てる私に、彰久は負けじと満面の笑みを浮かべた。

なんとか穏便に話を打ち切ろうと、あれこれ考えるものの、残念ながら私には、この男を煙に巻く術がない。

しかし、私の気持ちは二年前、彰久に別れを告げた日に、すべて封印してしまった。今さら彼が何か言ったとしても、私は応えることができない。

私と彰久の恋は、もはやタイミングを失ったのだ。

私が改めて断りを入れるよりも早く、彰久が口を開いた。

「もう逃がしはしない」

「彰久?」

「問答無用だよ、茜さん」

「っ!」

キラキラと瞳を輝かせながら、逃げ場はないよ、とほほ笑む彰久の顔は恐ろしかった。

彰久は一度やると言ったら、絶対に実行する男だ。

これは絶対に面倒くさいことになる、私はそう直感で判断した。

* * *

彰久に翻弄ほんろうされてしまった翌日の月曜日。

会社の更衣室で事務服に着替えながら、昨日のことを思い出してはため息をついていた。

彰久から『もう逃がしはしない』と宣言されて戸惑とまどっていると、突然、彼のスマホに電話が入ったのだ。

今なら彰久は追いかけれないと判断して、私は彼の腕を振りほどいて逃げた。

そりゃもう、後ろを振り返ることなく全速力で走った。そのあとは特に連絡がなく、少しだけホツとしている。しかし、これは嵐の前の静けさな気がしてならない。

「なによ、茜。元氣ないじゃない？」

何度目かのため息の直後、涼花がやって来た。私の顔色を見て、彼女は心配そうな顔をしている。始業まであと三十分はあるから休憩室へ行こう、と誘われた。

涼花は私と同じ二十九歳。私は短大卒で、涼花は四大卒だ。会社では私の方が二年先輩だが、同い歳ということですぐに仲良くなった。

私たちの見た目の雰囲気は正反対で、私がクール系だとすれば、涼花はとても可愛らしいお嬢様系だ。背の高い私と小柄な彼女が一緒にいるのを見た人たちから、よくでこぼこコンビだと言われる。

しかし性格はよく似ていて、お互い、恋は不得意。そんなところは同類だった。

だが、涼花は先日、幼馴染おとななじみとめでたく婚約した。同類だと思っていたのに、どうやら違っていたようだ。

すでに同居している涼花と婚約者は、籍は入れるが式はしないらしい。だから後日、旦那様を拜まがむため、彼女たちの新居にお邪魔する予定だ。

でも、今の不連続きな状況が好転しないうちは、とてもじゃないが行けそうにもない。

ラブラブオーラで私の心が荒またんでしまうことは、目に見えている。新婚家庭というのは、自分が幸せなときに覗きに行くものだ。

「で？　なんでそんなに落ち込んでいるのよ？」

休憩室に着くと、涼花は自販機でカップのコーヒーを買ってから、近くの椅子に座った。カップを熱そうに持ちながら、フーフーと息を吹きかけて冷ひやましている。

香かうばしい香りが漂たなよってくるが、今は飲む気になれない。私は飲み物も買わず、彼女の隣に座り、ため息をついた。

「先週からツイてない」

もつと深刻な話かと思ったのだろう。涼花は、拍子ひょうし抜けした顔をしている。

でもね、涼花さん。最近の私はツイていないにも限度がある。その限度を越してしまった今、これは深刻な悩みと言っていいだろう。

「はあ？ 真剣な顔して何を言いつかと思えば。特に原因はないってわけね」

「原因？ あるともさ。ツイていないことが原因なんだよ！」

不思議そうに首を傾げる涼花に、私はこの一週間で起きた、数奇かつ恐ろしい出来事の数々を詳細に話した。

色々な不運に見舞われてきた私だったが、特に昨日は大変な目に遭った。

まさか元彼の彰久が、見合い相手として再び私の目の前に現れるとは思ってもみなかった。

あまりの私の落ち込みように、涼花は眉間に皺を寄せた。

あのね、涼花さん。貴女の電撃結婚も、落ち込んでいる原因のひとつなんですけど。口を尖らせてチラリと視線を向けると、彼女は「ん？」と首を傾げた。

左手の薬指には、きらりと光るリング。婚約した証が、今の私には眩しすぎる。

涼花はコーヒーを一口飲んだあと、肩を竦めた。

「でもさ、たかが占いでしょ？ 大丈夫、当たらないって」

「で、でもさあ。この一週間、占い通り悪いことばかりあったんだよ？」

「確かに災難のラインナップが凄いいけどさ、そんなの偶然だって」

「なんで梅田と同じこと言うのさ」

「梅田課長？」

涼花は、ふーんと意味深に呟くと、ニヤリと笑った。

その笑みがあまりに怖く、私は思わず仰け反ってしまった。

「梅田課長と仲いいもんねえ、茜は」

「べ、別に。普通よ。ただの同期だし」

「ただの同期って感じはしないわよ？」

ニヤニヤと笑いながら私に絡む涼花は、酔っ払いみたいにたちが悪い。

ムツとして眉を顰めたが、彼女はそんな表情では動揺しない。ツンツンと私の頬を突いて、とても楽しそうだ。

「梅田とは友達みたいなものだし。何よ、その笑いは」

「そりや笑いもするわよ。だってさ、今日は月曜日。課長クラスは通常、始業時間より前に来て会議でしょ？ その前に梅田課長と茜が顔を合わせてそんな話をしたとは思えない」

相変わらずにやけっぱなしの涼花に、私は恐る恐る先を促す。

「だから？」

「ふふん。この休みの間に、二人で会ったんでしょ？」

「っ！」

確かにその通りだが、やましいことなんか無い。決してない。

むきになって反論しようとして、ふと我に返った。恋人のふりをしてほしいというあの直談判は……やましいことの内に入るかもしれない。